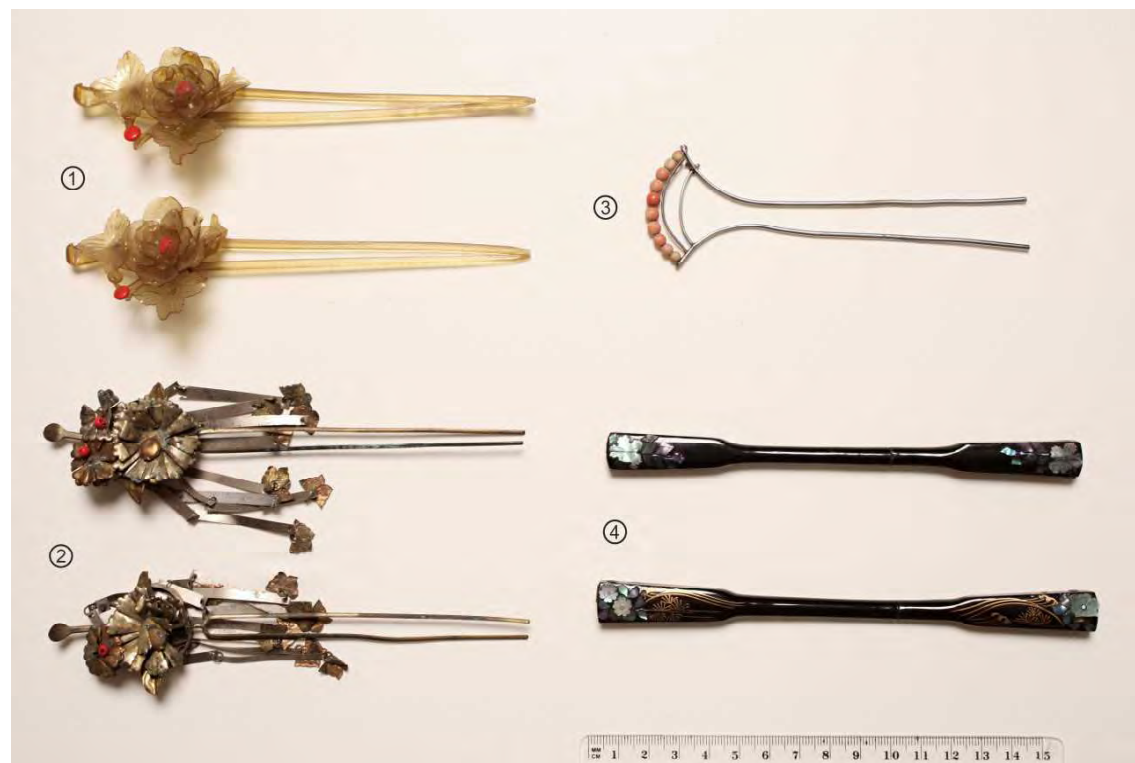


No. 163
民俗かんざし こうがい
簪・筭

簪は女性の髪飾りです。語源は髪挿しで、これは祭りや行事の時に髪に挿す草花や、男性が被る冠を留めるピンなど、髪に挿すもの一般を指す言葉でした。簪が女性の髪飾りを指すようになったのは江戸時代中頃からです。かつて女性の髪は、黒くてまっすぐなまが美しいとされ、日常で髪飾りをつけることはほとんどありませんでした。江戸時代中頃になると、女性は髪を様々な形に結い上げるようになり、髪留めや髪飾りとして簪を日常的に用いるようになりました。簪はやがて「女心の数だけある」といわれるほど、様々なものが作られるようになりました。

筭も女性の髪飾りですが、もともとは髪搔きという、髪をかきあげたり、痒いところを搔いたりするための棒で、男女ともに使う実用品でした。それが簪と同様、江戸時代中頃から女性の髪飾りとして用いられるようになり、両端をふくらませ装飾を施したものや、中挿しとよばれる二つに分かれる形のものが作られるようになりました。

写真の簪と筭は、宇城市三角町の美容師が、昭和時代に使っていた髪結い道具の中のひとつです。婚礼などで日本髪を結った方に貸し出していたのでしょうか。明治時代になると、西洋の髪形を真似た束髪が徐々に広まり、昭和10年代には熊本県内でも正装やよそ行き以外で日本髪を結う人は少なくなりました。こうして、日常で簪や筭を使うことは減っていきました。（迫田久美子）



①花簪 ②びらびら簪 ③束髪用簪 ④筭



熊本県

松橋収蔵庫

HPアドレス

<http://www.pref.kumamoto.jp/site/shuuzouko/>

最新号及びバックナンバーは、熊本県松橋収蔵庫のホームページに掲載しています。是非ご覧ください。

〒869-0524

熊本県宇城市松橋町豊福1695

TEL 0964-34-3301

FAX 0964-34-3302

メールアドレス

shuuzouko_kumamoto@yahoo.co.jp

編集・発行
熊本県松橋収蔵庫
宇城市松橋町豊福1695
TEL 0964-34-3301
2015年3月15日熊本の自然と文化
松橋収蔵庫だより

No.31

VOL. 8-4

平成26年度 第6回企画展示

フィールドサインを見つけにいこう

家の周りや山の中を歩いていて、動物の足あとや糞、食べかけの果物などを見つけたことはありませんか？

そのような、生き物たちが残していった生活の痕跡のことをフィールドサインといいます。

フィールドサインを観察すると、どんな生き物が、そこで何をしていたのかが見えてきます。

今回の展示では、身近な里山で見つかるフィールドサインと、それを残した生き物の標本を合わせて紹介していきます。ぜひお越し下さい。

雪の上に残された哺乳類の足跡
菊池市鞍岳 2015年1月4日会期：平成27年3月20日（火）
～6月21日（日）時間：3月 午前10時～午後5時
4月～ 午前9時～午後5時休館日：3月中は日曜日・祝日休館
4月以降は月曜休館
(ただし5月4日は開館、5月7日は休館)

入館料：無料

松橋収蔵庫の名称と開館日が変更になります

4月1日より、松橋収蔵庫は、県内の博物館、資料館、市町村等が連携して活動するための「熊本県博物館ネットワークセンター」となり、所蔵資料を用いた地域での展示会、地域での自然や文化に関する学習会や観察会など、県内どこに住んでいても博物館活動に参加できることを目指す「熊本県総合博物館ネットワーク」の中核施設として再スタートします。これに伴い、休館日が日曜日から月曜日に、開館時間が午前9時に変更されます。5月中旬には、講座やフィールドミュージアムの案内も各公民館等に配布する予定です。職員一同再スタートに向け張り切っています。気楽に利用してもらえると幸いです。



長洲町「金魚の館」での展示

熊本県では「熊本県総合博物館ネットワーク」の構築に取り組んでいます

私たちの住む熊本は、素晴らしい自然や文化遺産に恵まれています。

この宝を次世代に継承していくため、熊本県では県内の博物館、資料館、市町村等が連携して、県民の皆さんの身近な地域で様々な博物館活動を実施する「熊本県総合博物館ネットワーク」の構築を進めています。

No. 159
動物ニホンジカ（*Cervus nippon* シカ科）の頭骨

ニホンジカは日本各地の森林や草地に広く生息する草食動物です。写真1は2006年3月に上益城郡山都町内大臣にて採集した雌のニホンジカの頭骨です。

今回はニホンジカの角を紹介しましたが、今回は歯に注目してみましょう。哺乳類の歯は大きく分けて切歯、犬歯、臼歯の3つがあります。草食動物の歯は、草をすりつぶすための臼歯が大きく発達し、逆に犬歯は退化しています。切歯は食べ物をかみちぎるのに使う歯で、この歯にニホンジカの食べ方の特徴が大きくあらわれます。

多くの哺乳類はあごの上下ともに切歯がありますが、ニホンジカを含むウシの仲間の切歯は下あごにしかありません。したがって、植物を食べるときは、下あごの切歯と硬い上唇の内側で植物を挟んで引きちぎります。

また、ニホンジカは草や葉のような柔らかいものだけでなく樹皮も食べます。写真2の切歯（番号1～3）のうち、中央寄りの歯（番号1）は先がへらのように大きく広がっています。ニホンジカはそのへらのような切歯を使って、樹皮をそぎ取って食べます。このように、歯にはその動物がどんなものをどうやって食べているのかがあらわれます。（小原舞）



写真1

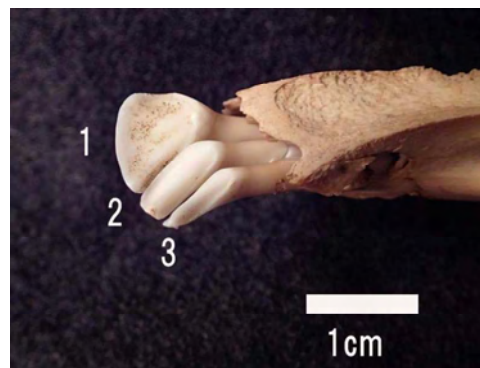


写真2：切歯（左下あご）の拡大写真

No. 160
歴史

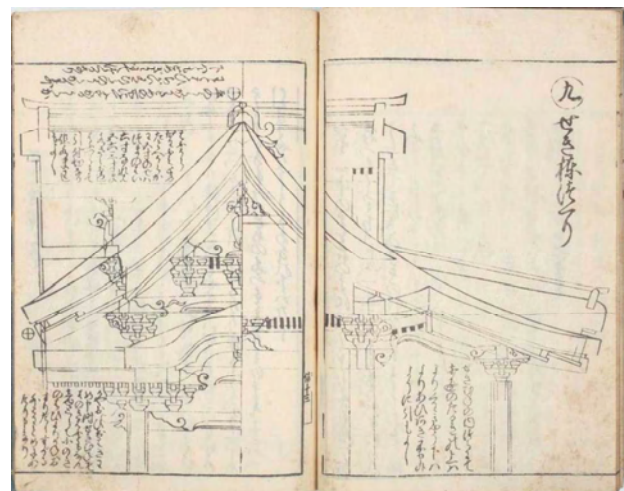
大工雛形秘伝書図解（熊本市本田家資料）

日本の建築技術は秘伝として伝えられるものでしたが、江戸時代以降、建築の基礎である規矩術（設計技法）や木割（部材の寸法の割合）などを図解した、建築設計の手引となる雛形本が木版刷りで一般に出版されるようになり、広く知られていきました。

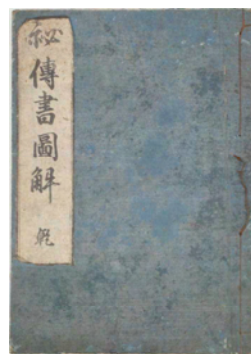
その雛形本の一つである『大工雛形秘伝書図解』は、享保12年（1727）に出版されたものです。巻末の刊記には、図師として京都柳田組大工の西村権右衛門の名があり、大工職に就いた者が早く技術を修得できるよう作成したことが

記されています。乾・坤の1巻2冊からなり、社寺の建築物について、乾には軒の規矩、坤には門や拝殿や堂などの木割が図と説明文で解説されています。

本資料は、現在の熊本市南区南高江の宮大工及び仏具師であった家に伝わったものです。「高江村大工」と書き入れがあり、大工仕事の参考とするため所持されていたものであったことが窺い知れます。このような書物や経験で得た技術によって地域の大工仕事を担っていた職人の姿が想像できます。（松本晃世）



本文「せき棟づくり」



表紙

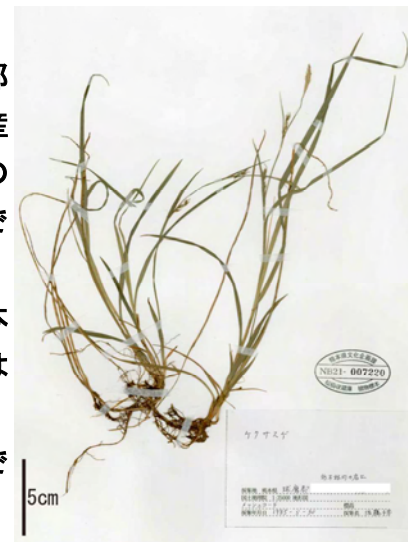
No. 161
植物ケヒエスゲ（*Carex mayebarana* カヤツリグサ科）

カヤツリグサ科のスゲ属 *Carex* は、世界に約2000種、日本には250種ほどが分布しており、それらは湿地や草地、森林などのさまざまな環境に生育しています。ケヒエスゲは、山地の林内に生育するスゲ属の一種で、別名ケクススゲとも呼ばれます。四国の一部と九州の中部以南だけに分布する日本固有の種であり、熊本県における分布も非常に限られることや、ニホンジカの被害によると思われる生育環境の悪化などの理由から、「熊本県の保護上重要な野生動植物ーレッドリストくまもと2014ー」では絶滅危惧IA類（CR）に選定されています。

ケヒエスゲは、前原勘次郎が昭和3（1928）年5月20日に球磨郡で発見したことに基づいて新種記載され、熊本県の生育地は模式産地とされました。前原勘次郎は、球磨郡内で教職に就きつつ植物の研究を行い、昭和6（1931）年に「南肥植物誌」を出版した人物です。学名の“mayebarana”は、前原勘次郎を記念したものです。

写真の標本は1985年に球磨郡内で採集されたものです。この標本によって、希少なケヒエスゲの生育だけでなく、1985年の採集地はケヒエスゲが生育できる環境であったことを示しています。

植物標本は、植物そのものの情報だけでなく、その植物が生育できる環境がそこにあったという自然環境の情報も含んでいます。（前田哲弥）



ケヒエスゲの標本

No. 162
地学

球顆玻璃斑岩

阿蘇郡小国町西部の山甲川兩岸の台地には、二酸化珪素の成分が多い火山噴出物よりなる山甲川流紋岩類が分布しています。山甲川流紋岩類の多くは灰白色で鉱物が一定方向に並んでいる構造を示す岩石でできていますが、写真1のような岩石も見られます。

この岩石は、多数の小さな球体が集まってできています。この小さな球体は球顆と呼ばれ、二酸化珪素を多く含むガラスや火山岩中に見られます。この岩石の球顆の中は、断面を見ると、長石や石英の結晶が放射状に集まってできており、球顆の表面は微細な結晶でできた層で覆われています。球顆の直径は約5mmで、球顆と球顆の隙間は、ガラス質の黒曜岩（写真2の黒い部分）で埋められています。ガラス質の物質で鉱物の隙間を埋めている火山岩を玻璃斑岩といい、球顆状の鉱物があるので球顆玻璃斑岩と呼びます。この岩石も、流紋岩の一種です。

火山岩は、同じ溶岩でも、冷え固まる時の条件によって岩石の見た目が全く異なってきます。山甲川流域の河原では、灰白色の流紋岩以外にも、球顆玻璃斑岩をはじめ様々な見た目の流紋岩が観察できます。（廣田志乃）



写真1



写真2 実体顕微鏡で撮った写真

これは、筆石という絶滅した動物の化石です。八代市坂本町深木に分布する石灰岩から産出しました。産出した地層は、古生代シルル紀(約4億4000万～4億2000万年前)にできた深水層で、その中の石灰岩からはサンゴなどの化石が産出します。

筆石は、半索動物という脊索に似た組織を持つ動物で、現在生きている動物の中では、フサカツギの仲間と考えられています。体は小さく、群体(コロニー)を作って生活していました。図に示すように、各個体が胞の集まり(胞群)の中に集まって群体を作っており、1つの個体は1つの胞の中で生活していました。写真の赤枠の中を見てみると、小さな胞がたくさん集まって鳥の羽のような形を作っているのが見られます。これが、筆石の化石です。筆石の化石は、岩石の表面に走り書きをしたような形状をしているため、初めは化石とは考えられていませんでした。そのため、ギリシャ語で「字の書かれた石」を意味する名前が付けられました。

筆石は、古生代カンブリア紀中期(約5億年前)に出現し、石炭紀前期(約3億2000万年前)に絶滅しました。中でもオルドビス紀からデボン紀前期(約4億9000万～3億9000万年前)に生息していた浮遊性の筆石は、進化の速度が速く広範囲に分布していたことから、世界的にきわめて重要な示準化石(その地層のできた時代を決定することができる化石)になっています。

ところが、残念なことに、日本では筆石の化石の産出は非常に少ないそうです。(廣田志乃)

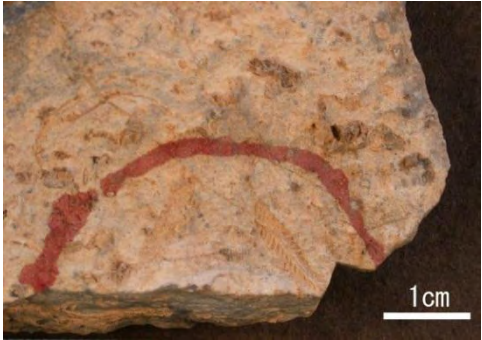


写真 筆石の化石(赤枠の中)

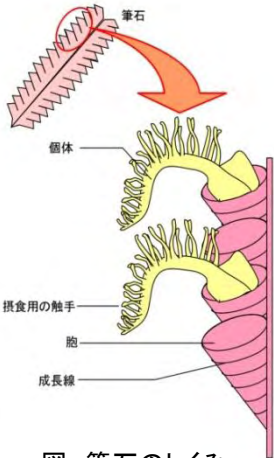


図 筆石のしくみ

フィールドミュージアムへ飛び出そう！

熊本県内さまざまな場所で自然観察会を行っています。

平成27年度は、これまで「海辺の生き物」、「阿蘇の草花」、「河原の石」、「夏の星座」などの自然観察会を行ってきました。残りのプログラムは、あと2つです。ぜひご参加ください。お待ちしております。



海辺の生き物を観察しよう



地層と化石の観察をしよう

- プログラム名: 落ち葉図鑑をつくらう
実施場所: 和水町江田肥後民家村
実施日: 11月29日(日) 受付期間: 10月16日～11月6日
- プログラム名: 水辺の冬鳥を観察しよう
実施場所: 宇城市大野川河口周辺
実施日: 1月24日(日) 受付期間: 12月21日～1月10日

※申込み方法等詳しくは、熊本県HP及び当センターの年間行事案内をご覧ください。

募集してます

熊本を知る講座 「植物観察基礎講座」を開催します！

実施日: 平成27年12月～平成28年3月の毎月第2日曜日(全4回) 時間: 10時～12時
実施場所: 博物館ネットワークセンターとその周辺
内容: 植物観察に必要な知識や技術(写真撮影・標本の作り方等)を講義と実技で学びます。
参加申し込み方法: 往復ハガキに「郵便番号」、「住所」、「氏名」、「年齢」、「電話番号」を御記入のうえ、熊本県博物館ネットワークセンター(〒869-0524 宇城市松橋町豊福1695)に、11月27日までに申し込んでください。
※定員を超えた場合は、抽選により受講者を決定します。
※申込ハガキに記載されている個人情報は、講座の運営に係ること以外に使用することはありません。

編集・発行
熊本県博物館
ネットワークセンター
宇城市松橋町豊福1695
Tel 0964-34-3301
2015年10月15日

熊本の自然と文化

熊本県博物館ネットワークセンターだより

平成27年度 夏休みキッズミュージアムが開催されました



化石のペンダントを作ろう



空飛ぶ種子を作ろう



石臼できなこを作ろう



親子で拓本にチャレンジ



セミの抜け殻探し



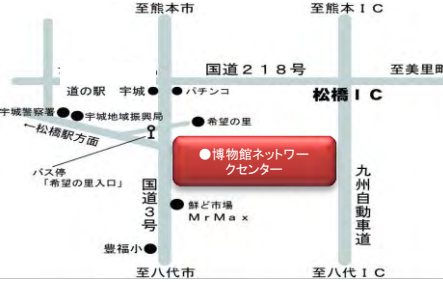
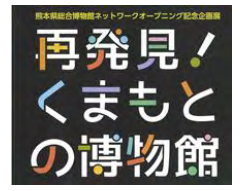
どんぐりクラフトをしよう

当センターでは、平成27年7月18日(土)～ 20日(月)までの3日間、子どもたちを対象とした体験教室「夏休みキッズミュージアム」を開催し、延べ457人の方に参加いただきました。

今回は、「石臼できなこを作ろう」、「化石のペンダントを作ろう」、「空飛ぶ種子を作ろう」など17種のプログラムに分かれて参加した子どもたちはいずれも、真剣に、そして楽しく熊本の自然や文化を学んでいた様子でした。

お知らせ 当センターが主催する企画展示・移動展示等を紹介します

- ★ 熊本県総合博物館ネットワークオープニング記念共同企画展 「再発見！くまもとの博物館」
開催場所: 熊本県立美術館分館 期間: 平成27年10月3日(土)～11月5日(木)
- 企画展 「ちょっと昔の暮らし探検Ⅶ」
開催場所: 当センター 期間: 平成27年10月1日(木)～11月29日(日)
- 移動展示 「フィールドサインを見つけにいこう」
開催場所: 熊本県民交流館パレア アクシア 期間: 平成27年10月30日(金)～11月29日(日)
- 移動展示 「絵葉書ものがたり」
開催場所: 金魚の館(長洲町 金魚と鯉の里広場内) 期間: 平成27年10月31日(土)～11月30日(月)



熊本県博物館ネットワークセンター

〒869-0524 宇城市松橋町豊福1695
TEL 0964-34-3301 FAX 0964-34-3302
Eメール: hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp
※最新号及びバックナンバーは、熊本県博物館ネットワークセンターホームページに掲載しています。是非ご覧ください。

No. 164 民俗 ひで鉢

ひで鉢とは、小さく割った松の根を燃やして明かりとする照明器具です。県内ではアカシヤトボシなどと呼ばれました。アカシヤトボシも明かりのことです。手元を照らすくらいの小さな明かりを県内ではコトボシと呼ぶところも多いようです。松の根は県内ではコエマツ、トボシマツなどと呼ばれます。脂分が多く燃えやすいので、古くから火の素材として利用されていました。

写真の資料は、阿蘇郡西原村で明治時代まで使われていたものです。ヒタキイシと呼ばれ、夜なべ仕事などの時に手元の明かりとしていました。これは灰石を台の形に加工してありますが、囲炉裏いろりの側に平たい石を置いたものや、トタンや鉄鍋を利用したものもありました。

明かりには、他の動植物の油を燃やす照明やろうそくなどもあり、ひで鉢と併用されていましたが、明治の中ごろからだんだんと石油ランプに代わっていきました。また、大正時代から昭和の中ごろにかけて電灯が普及すると、明かりは火から電気へと移り変わっていきました。(迫田久美子)



17.5cm × 18.5cm × 23.5cm

No. 165 動物 アゲハ *Papilio xuthus* (アゲハチョウ科)

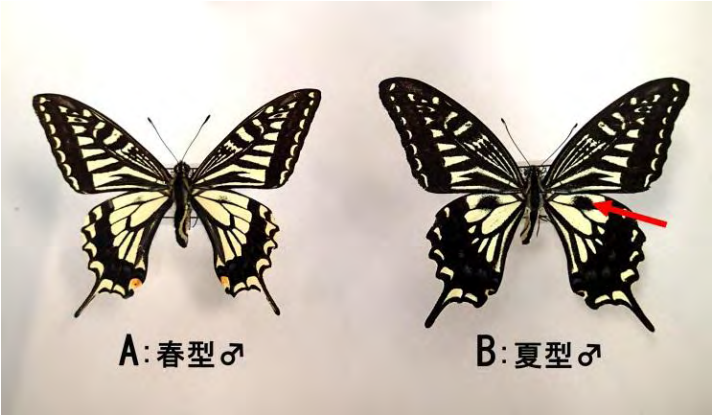
アゲハは日本全土に分布している身近なチョウです。成虫の寿命は数週間ほどと短いのですが、春から秋の間に羽化うか(蛹から成虫が出てくること)と産卵を4～5回繰り返すため、長期にわたってその姿を見ることができまさなごす。

チョウの仲間には、同種でも羽化する季節によって体の大きさや翅の模様の違いが生じるものがあり、これを「季節型」と呼びます。アゲハには2つの季節型があり、蛹で越冬して春に羽化するものを「春型」、初夏から秋にかけて羽化するものを「夏型」といいます。

写真の標本はどちらも宇城市松橋町豊福で採集した雄のアゲハです。Aは4月に採集した「春型」、Bは9月に採集した「夏型」です。2つを見比べてみると、BはAよりも体がひと回り大きく、翅表面の黒いすじがより太いため全体的に黒っぽく見えます。

また、アゲハの「春型」は、雄も雌も見にほぼ違いがありませんが、「夏型」では、雄の後翅中央に黒い点(写真の赤矢印)がはっきりとあらわれます。「夏型」の雌にはこのような黒い点は見られないため、これが「夏型」の雌雄を見分けるポイントになります。

アゲハのように見慣れた昆虫でも、季節を通して観察を続けることで、このような面白い発見をすることができます。(小原 舞)



No. 166 歴史 日本赤十字社佛國派遣救護班勤務心得 (八代市竹田家資料)

第一次世界大戦において、フランス政府からの要請で、日本赤十字社が大正3年(1914)12月からフランスへ派遣した救護班の人員には、この勤務心得が配られました。

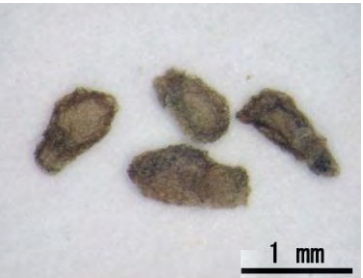
この資料には、フランス政府の指揮を受けて救護に従事することや、手術では、フランスの国情や風俗こくじゆうに気をつけ、患者の感情を害さないようにすることなどの注意点が記されています。

また、日本赤十字社社長花房義質からの訓示に「重要な任務だが、(中略)この心得書を執務上の指針とし、各員が心を一緒にし、互いに協力して業務を行うように」と記されています。

また、フランス政府は、日赤救護班が手術を行う際に立会人を置くなど、その救護能力を不安視していましたが、手術の力量と包帯の技術、班員の勤務心得を踏まえた真摯な人柄に触れると、負傷した多くのフランス人兵士が日本救護病院を希望し、救護班が二度の延長を経て 帰国する時は、フランス政府が三度目の延長を希望する程の信頼を得ていました。(堤 将太)

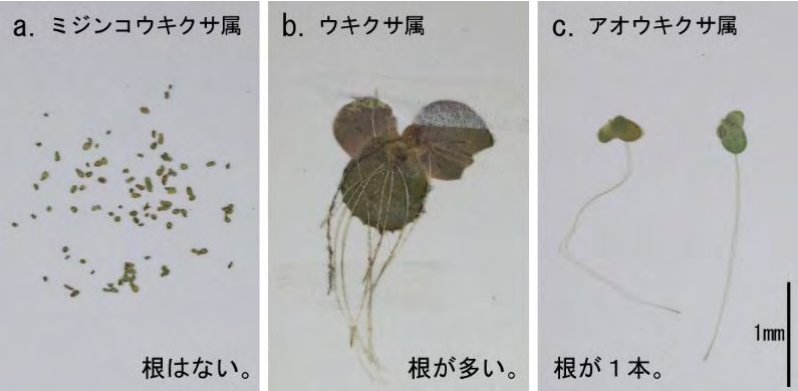


No. 167 植物 ミジンコウキクサ *Wolffia globosa* (ウキクサ科)



ウキクサの仲間は、水田や池、水路などの淡水でよく見られる水草で、水底(地面)に根を降ろさず、水面を漂って生活しています。体のつくりは、丸い葉のような形の葉状体があるだけに見えますが、花を咲かせ種子をつくる種子植物です。左の写真は、南ヨーロッパ原産で世界最小の種子植物といわれるウキクサの仲間、ミジンコウキクサの標本です。1979年に熊本市で採集されたものです。葉状体は長さ1mmもありません。ミジンコウキクサもまれにですが花を咲かせます。葉状体の中央に花孔とよばれる穴が開き、そこに花が咲きます。写真の標本には、残念なことに花はありません。

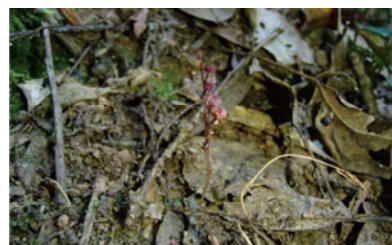
日本で見られるウキクサの仲間には、ミジンコウキクサが含まれるミジンコウキクサ属の他に、ウキクサ属とアオウキクサ属があります。これら3属は、1つの葉状体からでる根の本数で見分けます。ミジンコウキクサ属(写真a)では根はありませんが、ウキクサ属では3～10本程度(写真b)、アオウキクサ属では1本の根が出ています(写真c)。ウキクサを見つけたらルーペで花や根を探してみましょう。(前田哲弥)



No. 173 植物 ホンゴウソウ *Sciaphila nana* (ホンゴウソウ科)

緑色の色素を使い、太陽の光エネルギーを取り込んで有機物をつくる「光合成」は、植物の特徴的な働きのひとつです。また、陸上植物のほとんどは地中の根で菌類と共生し、光合成で作った有機物と、菌類が地中からとりこんだ栄養とを与え合って生活しています。しかし、光合成をおこなわず、菌類からもらう栄養で生活する植物もいます。このような植物は、「菌従属栄養植物」などとよばれます。

ホンゴウソウはこのような菌従属栄養植物の一つです。植物体は赤く、葉はごく小さく、光合成はしていません。写真の標本では、茎の先についた集合果が目立つ特徴的な草姿ですが、茎は直径1mm程度、高さ5cm弱、丸い集合果でさえも直径2mmほどの細い植物です。ホンゴウソウは、近年の確認例が少なく、「熊本県の保護上重要な野生動植物リスト-レッドリスト2014-」では絶滅危惧ⅠA類(CR)に選定されています。写真の標本は、ミュージアムパートナーズクラブ「雁回山の植物を観る会」の活動において、平成26年(2014)10月9日に採集されたものです。県内の新たな生育地の発見となる今回の確認は、当センターが推進する「県民参加の博物館活動」の成果の一つといえます。(前田哲弥)



果期のホンゴウソウ
(撮影：堀田晃海)



ホンゴウソウの標本

フィールドミュージアムへ飛びだそう！

●これから実施するプログラム

プログラム名：水辺の冬鳥を観察しよう
実施場所：宇城市大野川河口周辺
実施日：1月24日(日)
受付期間：12月21日～1月10日

●「フィールドミュージアムへ飛びだそう！」の申し込み方法

参加者全員の住所、氏名、年齢、電話番号、参加希望プログラム名をご記入の上、往復ハガキで申し込みをしてください。(返信用ハガキに住所・氏名を記載してください)。申し込み多数の場合は抽選で参加者を決定します。

- * 小学校3年生以下のお子様の参加の場合は、保護者の同伴が必要です。
 - * 申込書に記載されている個人情報は、講座の運営に係ること以外に使用することはありません。
- 申し込み先／熊本県博物館ネットワークセンター 〒869-0524 宇城市松橋町豊福1695

熊本県内さまざまな場所で自然観察会を行っています。



〇月を観察し、写真を写そう
場所：県民天文台
実施日：平成27年9月26日



〇落ち葉図鑑を作ろう
場所：肥後民家村
実施日：平成27年11月29日



熊本県博物館ネットワークセンター

URL
<http://kumamoto-museum.net/>

〒869-0524
熊本県宇城市松橋町豊福1695
TEL 0964-34-3301
FAX 0964-34-3302

メールアドレス
hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp

熊本の自然と文化

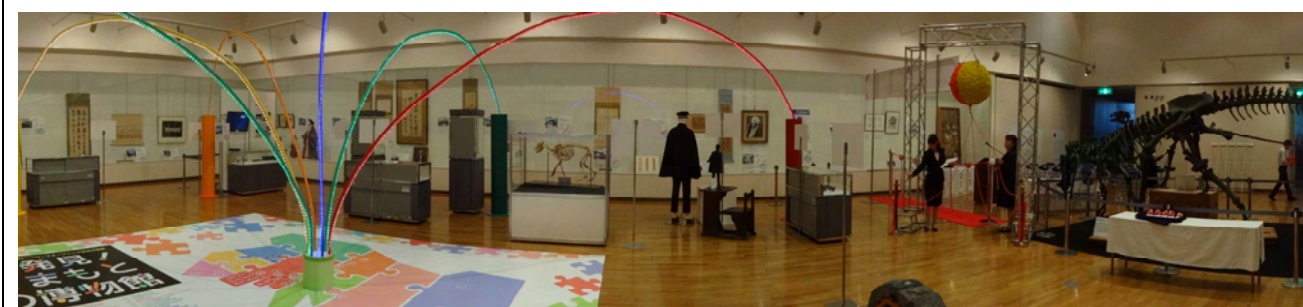
No.33

熊本県博物館ネットワークセンターだより

熊本県総合博物館ネットワークオープニング共同企画展「再発見！くまもとの博物館」を開催しました。



熊本県総合博物館ネットワークオープニング記念共同企画展「再発見！くまもとの博物館」を、熊本県立美術館分館で、平成27年10月3日(土)から11月5日(木)まで約1ヶ月間開催しました。県内の博物館・美術館・資料館等62館から各館の特色ある貴重な資料を一堂に集めた企画展でした。多くの方にご来館いただき有難うございました。



共同企画展会場

平成27年度 熊本県博物館ネットワークセンター企画展「雁回山、植物巡り」開催中です。

雁回山は、熊本市と宇土市の境に位置する標高300mほどの低山です。何本もの登山道が整備され、アクセスしやすい雁回山は、意外なほどたくさんの生き物たちがくらしています。この雁回山に生育する植物について、熊本県博物館ネットワークセンターとセンター利用者が協力して、5年にわたって調査してきました。その成果をもとに、雁回山の植物を標本と写真で紹介しています。

主催：熊本県博物館ネットワークセンター
ミュージアムパートナーズクラブ「雁回山の植物を観る会」

会場：熊本県博物館ネットワークセンター

期間：平成27年12月12日(土)～平成28年3月6日(日) 午前9時～午後5時

休館日：毎週月曜(ただし、月曜日が祝日の場合は、その日以後の最初の平日)
及び年末年始(12月29日～1月3日)

No. 169
地 学 石神山のザクロ石

熊本市の西部にある石神山は、^{りんけいせき}鱗珪石（2号で紹介）の産地として有名ですが、鱗珪石の他にもザクロ石という鉱物が産出します。

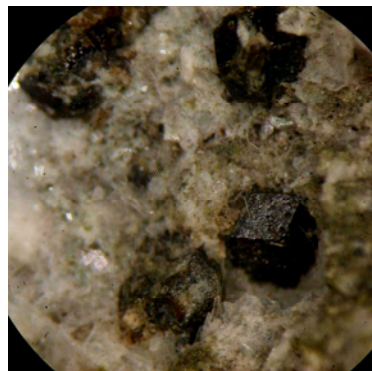
石神山は、金峰火山の外輪を構成しており、金峰火山が活動を始めた頃（約110万年前）にできた火山です。マグマがあまり流れずに押し上げられてできた溶岩円頂丘で、安山岩でできています。石神山では古くから採石が行われ、晶洞の中や割れ目沿いに鱗珪石やザクロ石などの鉱物が見られます。

ザクロ石というのは、似た性質を持った鉱物グループの名前で、これは鉄礬^{てつばん}ザクロ石（almandine）という、変成岩や火成岩などで産出するザクロ石です。本標本のザクロ石は、大きなものでも2～3mm程度ですが、12面体の結晶の形の一部が確認できます。また、色は黒もしくは赤黒い色をしています。光に透かすと褐色透明に見えます。

現在では石神山の山体の半分以上が消失しており、採石も行われていないので、鱗珪石やザクロ石を探すのは難しくなりました。（廣田志乃）



ザクロ石が含まれている安山岩



ザクロ石の結晶の形が確認できる

No. 170
民 俗 湯たんぽ

湯たんぽは、容器の中に湯を入れて、体にあてて温める暖房器具です。中国から伝わった湯婆^{たんぽ}が元ですが、日本では頭に「湯」を重ねて湯湯婆と呼ぶようになりました。湯たんぽは寝る時に使うのが一般的で、布で包んで温度調節をします。中の湯は、翌朝、顔を洗うのに利用していました。

湯たんぽは、江戸時代には銅製で箱形のものもありましたが、明治時代には陶製で筒型やかまぼこ型のもの（写真1）が一般的となりました。この頃の湯たんぽには栓がないものが多く、購入者が木を削るなどして自分たちで作っていました。大正時代に「浅井式湯婆」という、トタン製の楕円形容器に強度を保つための波型が付けられたもの（写真2）が登場します。これが広まって、昭和初期には日本で製造される湯たんぽのほとんどがこの形状の金属製のものとなりました。現在でも湯たんぽというとこの形が一般的となっています。しかし、戦時中は金属不足となったため、代替品として陶製の湯たんぽ（写真3）が再び作られていました。

戦後は電気暖房器具の普及などにより、湯たんぽはだんだんと使われなくなっていきました。しかし2000年代の省エネやエコブームで人気が高まり、現在ではプラスチックやポリ塩化ビニル製のものなども製造されています。（迫田久美子）



写真1 陶製湯湯婆



写真2 浅井式湯婆

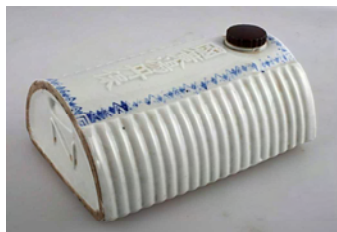


写真3 国策湯丹保

No. 171
動 物 ナガサキアゲハ *Papilio memnon* アゲハチョウ科

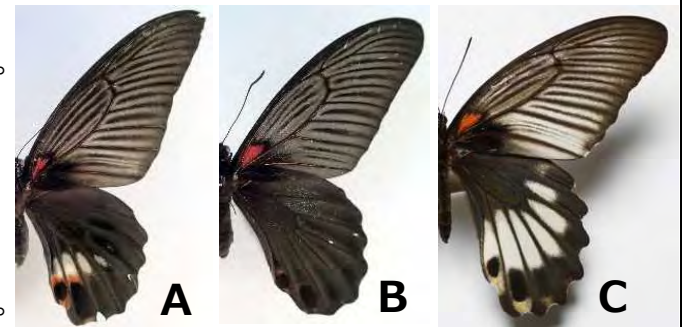
写真1: 雄（熊本市清水町）



写真2: 雌（宇城市松橋町）

ナガサキアゲハは本州以南に分布するアゲハの仲間です。幼虫はミカン類の葉を食べるため、栽培ミカン類のある人里でよく見かけられます。雄（写真1）は、全体が黒一色ですが、雌（写真2）は雄と比べて白っぽく、前翅の付け根に赤褐色の紋があり、後翅には白斑があります。ナガサキアゲハの雌では、この後翅の白斑にさまざまな変異があらわれます。

写真3はすべて雌のナガサキアゲハです。**A**の個体は国内で一般的に見られる雌です。**B**の個体は一見すると雄のようですが、これは後翅の白斑が消失した雌で、まれに見ることがあります。**C**の個体は、後翅の白斑が大きく発達し、全体的に白みがかった雌です。ナガサキアゲハの雌は、南の地方のものほどこのように白化する傾向があります。ナガサキアゲハを見つけたら、ここに載っている写真と見比べてみてみましょう。自分が見つけたものと、どこがどんなふうにあるのか、よく観察してみましょう。（小原舞）

写真3: 雌の白斑の比較
（採集地は、A: 宇城市松橋町、B: 宇城市松橋町、C: 奄美大島）No. 172
歴 史 盆（豊福愛国国防婦人会）

本資料は、黒い漆塗りの盆で、大きさは各辺約24.0cm、左下に「豊福愛国国防婦人会」と文字が入れています。「豊福愛国国防婦人会」とは、昭和の戦時中にあった、下益城郡豊福村（現在の宇城市松橋町豊福）の愛国婦人会・国防婦人会のことです。

愛国婦人会と国防婦人会（大日本国防婦人会）は、戦時において軍事後援活動を行った婦人団体です。愛国婦人会は明治34年（1901）、主に皇族や華族など上流階級の夫人を中心に、兵士の慰問、遺族の支援や社会事業を目的として設立されました。一方、国防婦人会は、昭和7年（1932）に軍部の支援で戦争協力のため設立され、「国防は台所から」のスローガンで、会員は大衆婦人に広がっていきました。

熊本県においても、両会とも各町村に分会が結成され、出征兵士の送迎や慰問袋の作製など、戦時下で活発に活動を行いました。豊福愛国婦人会は昭和16年（1941）に、活動の一つである食糧増産の成績により表彰を受けています。太平洋戦争に入った翌年の昭和17年（1942）には、政府の主導で各婦人団体が統合されて大日本婦人会が設立されました。20歳以上の未婚者を除く全女性が対象となり、国防訓練にも動員され、総力戦体制が強化されていきました。

本資料は、こうした昭和の戦時下で豊福愛国・国防婦人会の活動の記念品として作られました。今年は戦後70年の年です。このような資料から、当時の社会を知り考えることができます。（松本晃世）



写真1 盆（豊福愛国国防婦人会）

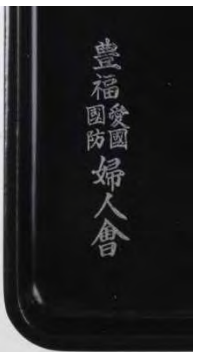


写真2 左下部分拡大

No. 183
歴 史
しんこうくまもとだいはくらんかいきねんえはがき
新興熊本大博覧会記念絵葉書

新興熊本大博覧会は、昭和10年（1935）3月25日から5月13日までの50日間、熊本市水前寺公園近傍一帯を会場として行われた熊本市主催の博覧会です。産業と文化・観光の振興、熊本の紹介を目的として開催されました。会場には、全国の特産品を集めた産業本館、九州の観光地を紹介した観光館、他多数の展示館が立ち並び、催物も行われ、多くの観光客が訪れて、開催期間中の入場者は約106万人と大盛況となりました。

この博覧会を宣伝する印刷物の一つとして絵葉書が作られました。写真1は3枚組で作られた記念絵葉書のうちの1枚で、図柄には博覧会正門の写真が使用されています。書簡として使用されたもので、昭和10年4月8日消印、差出部分に「博覧会場にて」、文面には「博覧会もいよいよ賑はって参りました。昨日が今迄に一番入りが多く三万を越へて居ました。」とあり、博覧会が賑わう様子を伝えています。また、写真2は暑中見舞用に作製された絵葉書で、水前寺公園と、昭和9年（1934）に国立公園に指定された阿蘇の風景を描いた、博覧会を宣伝する図柄となっており、博覧会前年から配布され、実際に使用されることで宣伝の効果をえました。

これらの絵葉書は当時の出来事を私たちに伝えられる歴史資料です。（松本晃世）



写真1 新興熊本大博覧会記念絵葉書



写真2 暑中見舞「水前寺公園ト大阿蘇国立公園」



熊本県博物館ネットワークセンター

URL
http://kumamoto-museum.net/kmnc

〒869-0524
熊本県宇城市松橋町豊福1695
TEL 0964-34-3301
FAX 0964-34-3302

メールアドレス
hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp

編集・発行
熊本県博物館
ネットワークセンター
宇城市松橋町豊福1695
Tel 0964-34-3301
2016年7月15日

熊本の自然と文化

熊本県博物館ネットワークセンターだより



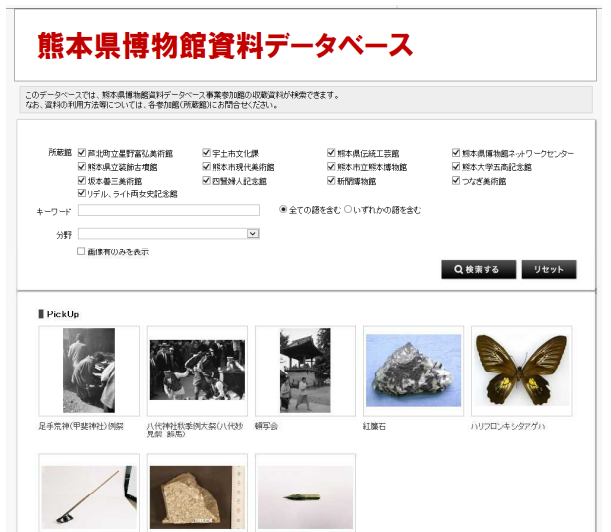
熊本県総合博物館ネットワークポータルサイトで情報発信中

熊本県博物館ネットワークセンターでは、県内の博物館や資料館などのポータルサイトを開設し、イベント情報、県内の自然と文化に関する情報を発信しています。

お好みの情報を見つけて、県内の博物館や自然、史蹟などを巡ってみませんか。

また、このサイトでは県内の博物館の収蔵物も掲載しておりますのでご活用下さい。

URL : kumamoto-museum.net/



PTA活動や子ども会活動で利用してみませんか

熊本県博物館ネットワークセンターでは、「ドングリクラフト」「貝殻クラフト」「草木染め」など、体験を通して自然や文化に触れてもらうためのプログラムを準備しています。PTA活動や子ども会活動で利用してみませんか。熊本県博物館ネットワークセンターの職員が、お伺いします。

体験に係る材料費は必要ですが、職員の交通費、謝礼は発生しません。

なお、申し込み方法やプログラム内容は、博物館ネットワークセンターのホームページをご覧ください。



貝殻クラフト

No. 179 センチコガネ *Phelotrupes laevistriatus*（センチコガネ科） 動 物

昆虫には動物のフンを主食にしている「フン虫」と呼ばれるものがあります。センチコガネはフン虫の一種で、日本では北海道から屋久島まで広く分布しています。ウシやシカなどほ乳類のフンを食べるほか、動物の死がいや、キノコなども食べます。食べ物となる新鮮なフンを探して森林内や草原を飛び回り、フンを見つけるとその中に潜り込み、フンの下の地面に穴を掘って生活します。

フンを食べるという変わった生態をもつセンチコガネですが、さらに変わっているのはその体の色です。写真の標本はすべてセンチコガネであり、体の色は黒色をベースに、緑、金、青、紫、赤紫色の光沢におおわれて、とても色彩豊かです。なぜこんなにきれいで色彩豊かなのか、はっきりとした理由は分かっていません。

今回紹介した標本は、すべてネットワークセンターの周辺で採集したものです。ここでは赤紫や緑がかった個体の割合が比較的多かったのですが、採集する地域や採集の時期を変えたりすれば、また違った結果が得られるかもしれません。

（小原舞）



宇城市松橋町で採集されたセンチコガネの体色変異

No. 180 ハタケテンツキ *Fimbristylis stauntonii*（カヤツリグサ科） 植 物



ハタケテンツキの標本



ハタケテンツキの果実

カヤツリグサ科テンツキ属の植物は湿地を好むものが多く、身近な湿地環境である水田などではテンツキやヒデリコなどがよくみられます。ハタケテンツキも水田などに生える植物ですが、テンツキやヒデリコと比べるとまれで、環境省のレッドデータブックでは絶滅危惧IB類（EN）に、「熊本県の保護上重要な野生動植物レッドリストくまもと2014」では絶滅危惧IA類（CR）に選定されています。生育地が限られ、もともと希少であることが選定理由になっています。

ハタケテンツキの形態的な特徴の一つは、表面に格子状の模様がある長楕円形の果実です。テンツキ属植物には幅が広い倒卵形の果実を付ける種が多く、重要な見分け点になります。しかし、果実の長さは1mm程度で、確認にはルーペが必要です。

2012年に、これまで生育が確認されていなかった熊本市と嘉島町でハタケテンツキの生育が確認されました。写真の標本は、嘉島町で採集されたものです。身近な環境でも、注意して見てみると、意外な生き物に出会えることがあります。（前田哲弥）

かしまち

嘉島町でハタケテンツキの生育が確認されました。写真の標本は、嘉島町で採集されたものです。身近な環境でも、注意して見てみると、意外な生き物に出会えることがあります。（前田哲弥）

No. 181 流れ模様のある岩石（結晶片岩） 地 学

岩石の中には、不思議な模様を持つものがあります。ここで紹介する岩石は、白と黒灰色との縞があり、その縞が曲線を描くことで流れ模様を持っています。この模様はどのようにしてできたのでしょうか？

写真の岩石は、玉名郡和水町で採取された結晶片岩です。結晶片岩は、大地の深い場所で岩石が高い圧力を受けたために、岩石に含まれる鉱物が並び直したり、他の種類の鉱物に変化したりして（変成作用）できた岩石です。鉱物が平行に並んでできる構造（片理）が発達しており、しばしば鉱物の種類の違いによる縞模様が見られます。この結晶片岩は、約2億年前に泥岩が高い圧力を受けてできたものと考えられています。



流れ模様のある岩石（結晶片岩）

また、変成作用が起こる時に、鉱物の粒が動くことで岩石が歪み、流れ模様を作ることがあります。ハチミツや水飴などに色や縞模様を着けて練った時と同じような状態です。硬い岩石でも、高い圧力が加わると、まるでハチミツや水飴のような動きをするのです。

このような流れ模様を持つ岩石は、地中でとてつもなく大きな力がかかったことを教えてくれます。（廣田志乃）

No. 182 自在鉤 民 俗

自在鉤は、囲炉裏の上に吊して鍋や鉄瓶などを掛ける鉤です。鉤が上下に自在に動いて、火元と鍋の距離を調節できることからこう呼ばれます。県内ではジジャカギ、ジロカギなどと呼ばれていました。

自在鉤は、竹筒と軸棒と横木からなります。軸棒は竹筒の中を上下する細長い棒で、下の端に鍋などを掛ける鉤が付いています。グミや松の股木を利用して作られていました。枝で作るのは子鉤（子欠き）といって縁起が悪いので、必ず親（幹）で作ると言われていました。

横木は鉤の高さを調節する器具で、軸棒が通る穴のある側を斜めに下げて、摩擦により軸棒を固定する仕組みとなっています。鉤の高さを調節するときは穴を水平にして軸棒を動かします。横木は桑や南天で作られましたが、中には梅で作って松の軸棒と併せて松竹梅の縁起を担ぐこともありました。また、魚を象ったものもあり、これは火伏せの意味とも、囲炉裏の神への供物の意味ともいわれています。

かつて、囲炉裏は、煮炊きはもちろん、照明や暖房も兼ね備えた大切な場で、火の神様が居るとされていたので、自在鉤も普段から美しく手入れされ、また正月には白米を包んだおひねりが飾られるなど、大切にされていました。（迫田久美子）



ジザイカギ 球磨郡水上村湯山
5×32.5×97.5 昭和の中頃まで使用

No. 188
動物

キュウシュウカラヒメドロムシ *Sinonychus tsujunensis* (ヒメドロムシ科)

ヒメドロムシ類は、主に河川に生息する、1～5mm前後の微小な水生甲虫です。これまで亜種も含めて60近い種類が知られていますが、まだ名前がついていないものも多く存在しており、分類整理が十分に進んでいるとは言えません。近年、いくつかの県や河川レベルでのヒメドロムシ類の分布報告が発表されており、それらによると、地域ごとに、また、河川の源流域から下流域、河床の礫や砂、流木、植生の根際といった環境ごとに生息する種類が異なり、河川環境の指標種として注目されています。

先日、当センター職員が採集したヒメドロムシ類の標本を調べていると、手持ちの図鑑には載っていない、ひときわ小型でずんぐりとした、一見して異形のものが目に付きました。それが写真1のキュウシュウカラヒメドロムシで、この標本が採集された年と同じ2012年に名前がつけられたばかりの“新種”でした。

キュウシュウカラヒメドロムシは、熊本県山都町のほか、大分県中津市、熊本県人吉市、鹿児島県川辺町から得られた標本をもとに新種として発表され、その後、大分県日田市、長崎県諫早市からも記録されています。山都町では、通潤用水から採集されていて、学名にある *tsujunensis* は「通潤の」という意味です。

前述の当センター職員採集の標本は、熊本市の雁回山中腹を流れる小川から得られたもので(写真2)、他の産地でもおおむね丘陵地の砂泥底の小川から採集されているようです。

1mmちょっとしかなく、食性も含めて謎の多い本種ですが、熊本県には、まだまだこうした未知の生き物が、人知れず生息しているということを想像するとワクワクしませんか？

(中藺洋行)



写真1 キュウシュウカラヒメドロムシ



写真2 キュウシュウカラヒメドロムシの生息環境



熊本県博物館 ネットワーク センター

URL
<http://kumamoto-museum.net/kmnc>

〒869-0524
熊本県宇城市松橋町豊福1695
TEL 0964-34-3301
FAX 0964-34-3302

メールアドレス
hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp

編集・発行
熊本県博物館
ネットワークセンター
宇城市松橋町豊福1695
TEL 0964-34-3301
2016年10月15日

熊本の自然と文化

熊本県博物館ネットワークセンターだより



熊本県博物館ネットワークセンターの活動を 一部再開しました！

4月に発生した熊本地震では、熊本県博物館ネットワークセンターも被災しました。このため、現在は休館し、復旧に取り組んでいます。また、8月からは自然観察会などの館外で開催できる行事等について、一部再開しています。

今後もさまざまな行事を計画しておりますので、ふるってご参加下さい。



フィールドミュージアムへ飛びだそう! 「火星・土星と夏の星座を観察しよう」
(平成28年8月6日(土) 熊本県民天文台)

なお、行事等の詳細につきましては、熊本県博物館ネットワークセンターのホームページをご覧ください。

URL <http://kumamoto-museum.net/kmnc>

P T A 活動や子ども会活動で利用してみませんか

熊本県博物館ネットワークセンターでは、「ドンダリクラフト」「貝がらクラフト」「草木染め」など、体験を通して自然や文化に触れることができるプログラムを準備しています。P T A 活動や子ども会活動で利用してみませんか。熊本県博物館ネットワークセンターの職員が、お伺いします。

体験に係る費用は材料費のみで、職員の交通費、謝礼は必要ありません。

なお、申し込み方法やプログラム内容は、博物館ネットワークセンターのホームページをご覧ください。



草木染め

No. 184 植 物 イソヤマテンツキ *Fimbristylis sieboldii* (カヤツリグサ科)

塩分を多く含む海水、強い日差しによる高温や乾燥、強い風や波で土壌が絶えず動くなど、海岸は植物にとってとても厳しい環境です。

湿地を好むカヤツリグサ科テンツキ属植物の何種かは、この厳しい海岸に適応して生育しています。その一つがイソヤマテンツキです。和名の「イソ」は「磯」で、海岸に生えることに由来します。全体に硬い植物で、茎は時に40cmほどの高さになり、その先に長さ1cm強の細長い小穂（花穂）が少数集まった花序を付けます。長さ1mm程度の果実は倒卵形で、断面はレンズ型、表面は滑らかです。果実の先端に残るめしべの柱頭には毛が生えています。



果実

写真の標本は、1967年に宇城市三角町で採集された標本で、これを含め52点のイソヤマテンツキの標本が当センターに収蔵されています。これらの標本は、道路や防災施設の建設のような人為、あるいは自然の影響を受け変化しやすい海岸の植生を記録する貴重な資料となっています。（前田哲弥）

No. 185 地 学 オオバタグルミ *Juglans cinerea* var. *megacinerea*

作家の宮澤賢治は、地質学・鉱物学に造詣が深く、その作品には地質や鉱物についての事柄が数多く織り込まれています。実は、彼はある化石を日本で最初に発見した人なのです。

その化石は、宮澤賢治が岩手県花巻市の約150万年前の地層から発見したもので、早坂一郎博士によってアメリカ東部に自生するバタグルミ（*Juglans cinerea*）の化石として発表されました。現在ではバタグルミではなく、化石種のオオバタグルミ（*Juglans cinerea* var. *megacinerea*）と名付けられています。

写真1の標本は、上天草市大矢野町柳で産出したオオバタグルミの種子です。この化石は、大矢野島に分布する約300万年前に堆積した砂礫や砂を主体とした地層（大矢野層）から産出しました。

オオバタグルミの種子は、写真1で見えるように、全体的に細長く、表面は縦に刻まれた深いシワによってできたヒダ状のもので覆われています。日本に自生するクルミの仲間は種子の表面のシワが浅いので（写真2）、双方を比べると、形が全く異なっていることがわかります。

オオバタグルミの化石は、日本だけでなく世界各地でも発見されていることから、かつては世界中に広く分布していたクルミであることがわかっており、さまざまな研究がなされています。

『銀河鉄道の夜』では、このクルミ化石の発見を元にした記述がありますので、探してみてもはどうでしょうか。（廣田志乃）



写真1 オオバタグルミの化石



写真2 日本に自生するクルミ（オニグルミ）

No. 186 民 俗 お櫃とお櫃入れ

お櫃は、炊きあがったご飯を移し入れる容器です。熊本県内ではイイビツ、メシツギなどと呼ばれています。杉や桧、榎など、吸水性の良い素材で作られた桶、あるいは曲げ物が一般的ですが、冠婚葬祭には漆塗りのものも使われました。

お櫃は、ご飯の粗熱を取り余分な水気を吸収します。そのためご飯は、より美味しくなると同時に、保温と調湿の効果から冷めても硬くなりにくくなります。昔は、一日分のご飯を一度に炊くことが多かったので、ご飯を長時間美味しく保存する工夫がされていたのです。さらに、冬の寒い時期には、稲わらを編んで作ったお櫃入れの中にお櫃を入れて保温していました。（迫田久美子）

お櫃（桶）36×36×28cm
熊本市北区池田町お櫃（曲げ物）27×27×15.5cm
玉海市天水町部田見お櫃（塗り物）23×23×12cm
天草市牛深町お櫃入れ 34.5×34.5×23.5cm
玉海市天水町部田見

No. 187 歴 史 感謝状（八代市竹田家資料）

大正3年（1914）に開戦した第一次世界大戦に際し、日本赤十字社は、フランス・イギリス・ロシアに対して、3班の救護班を派遣しました。

写真1は、この時にフランスに派遣された仏国派遣救護班が、任務を終えて帰国する直前の大正5年（1916）6月に篤志看護婦の団体ユニオン・デ・ファム・ド・フランスのA. ボンヌフーから仏国派遣救護班員へ贈られた感謝状で、救護看護婦として救護班に参加した竹田ハツメが保管していたものです。

このA. ボンヌフーは、ユニオン・デ・ファム・ド・フランスでパリ第16区の代表を務めていて、救護班が勤務していたパリの日本救護病院で篤志看護婦として勤務していました。

この感謝状の末尾には、「A. Bonnefous」と書かれた本人直筆のサイン（写真2）があります。そして文面には、「海のはるか向こうから17ヶ月の長い間、昼夜、大勢の負傷兵を治療してくれたことを感謝する」や、「日本赤十字社の救護活動によりフランスからの名誉を得た」と記されており、「塩田医長と班員への名誉はとても表彰されるでしょう」と結ばれています。

当初フランスで評価が低かった救護班が、救護活動の結果、フランス政府だけではなく、フランスの人々からも評価を受け、また信頼されるようになったことがわかります。（堤将太）



写真1 感謝状

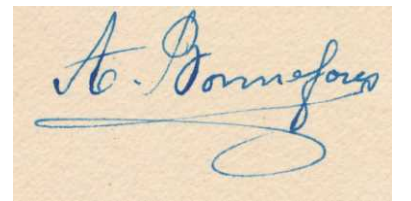


写真2 感謝状（サイン部分拡大）